

---

**未定**

今 ひよこ

---



## プロローグ（前書き）

文章が安定しないです。  
すいません。

## プロローグ

聖ディアティナ歴 997年

王城エルグラム。

ここは、その一室。離れにある約30畳ほどの部屋の床には、凝って作ってある赤い絨毯。高い天井には大きくよくわからない照明器具がぶら下がっていた。

そして部屋の中央にこれも人が悠々と川の字に5人ほど眠れるんじゃない、というデカいベットのの上に一人の少女が腰まで伸ばした綺麗なブロンドの髪を振り乱し、布団をはねのけ寒そうに丸まって寝ていた。

コンコンコンと3回ドアがノックされる。

「お嬢様！朝です！起きてください！」

しっかりとした男の声が響く。

「うーん。あと、…何分にしようか？うーん。サナギが蝶になるまで…グ〜」

ドアの向こうの40代ぐらいの執事服を着た男は、そこまで考えることができるなら起きろ！ということ在必死に心に押しとどめる。

「今日は、“あの”騎士殿が見えられてるのになあ〜残念だな〜とゆうよりそこまで考えているのなら起き「何よ！それをさっさと言いなさいよー！」…て下さい」

執事の男が言葉を言い切る前に部屋の中がドタバタと騒ぎ出す。内心を隠しきれなかった執事はいつものことかと呟きながらドアの前で背筋を伸ばして待つ。そして、部屋の騒音が消え、扉の前から大きいものを引きずる音がズズズと聞こえる。執事は、やっとかと待ちかまえ少女にかける言葉を用意する。

そしてバンツと音を立てて扉が開け放たれる。

「ねえ！アル「おはようございます。お嬢様」…るの？」

ああもう！と言いたげな顔をしながら少女は。

「はいはい。おはようおはよう！ それでどこに来ていらっしやるの？」

この執事はきちんと挨拶を返さないと何の質問にも返さないし、利く耳持たずになつてしまふ。なのでいつも少女が折れてしびしび挨拶を返すのだ。毎朝のことである。

「挨拶は、きちんとして下さい。と言っていますのに教育係兼執事の私の身にもなつていただけませんか？何が「おはようおはよう！」ですか。ハアゝ それとですねいつも言っていると思いますが、ドアの前に家具でバリケードを作らないでください。あと言葉づかいももっと丁寧にして下さい。そしておちつゝわかりましたわかりました。直せばいいんですよ！それとこの家具は、トルドがー」……わかつていただければいいですが…」

朝っぱらから騒がしい二人である。

「それはともかく湯でも浴びて綺麗にしてきて下さい。それと、騎

土殿には応接間で待っていただいておりますので衣装もきちんとしてきてくださいね」

トルドは静かに言い聞かせるように言った。

それを聞いた白いネグリジェ（下着は透けてない）を着た少女は、わかった！と風呂場に走って行った。見ていた執事は、廊下を走らないでくださいといつもいつているのにと、ため息を吐きながら客人のもとに足を進めた。

風呂に入り身だしなみを整えた少女は、応接間のドアの前にいた。そして自分の格好を見直す。

まずドレスは、ある程度身体の起伏がわかる落ち着いたライトブルー。胸元はそこまで開いておらず、首からかけた黒曜色の宝石が鈍く輝いてる。ドレスと同じ色のドレスグローブに顔にはうっすらと化粧をしている。

少女は、悶々とちょっと地味すぎたかな？とかもつと大胆にけばよかったなどとブツブツ一人ごちていた。

「お嬢様？何をしていらっしやるんですか？」

不意にドアが開きトルドが声をかけた。

ビクツとなりながら少女は、い、いま入るところだったのよと、中に聞こえないようにどもっている。

執事は、ハアそうなんですかと棒読みで答えお待ちになっていら

つしゃるので早く入ってきて下さいねと、部屋の中に戻る。少女は、よし！と気合を入れコンコンと扉をノックする。中からどうぞと落ち着いた声が聞こえる。心臓がバクバクいうのがわかる。

それを、平常心平常心と言い聞かせる。そして彼女を普段から知っている人からすると誰これ？という落ち着いた声で。

「失礼致します。遅くなり申し訳ありません」

清楚系お嬢様風な感じで姿を見せた。

ところ変わってお嬢の部屋。中には二人。もちろんお嬢様と執事である。

「誰よ！！さっきの…アルン様じゃないじゃない！！」

彼女は、自分の思い人？憧れているのは間違いないであろう人がいると思っていた。しかし、扉を開けてみれば自分よりも30は上であろうおっさんがいたのだ。これでは、自分が、一人で舞い上がってバカみたいじゃない！あんなに頑張って猫かぶったのにと憤っていた。

「それは、お嬢様の早とちりでしょう。私は、ただあなたの”ナイト”になるかもしれない人が来ていますよ」といったつもりだったんですが」

トルドは顎を撫でながら、そう聞こえなかったらすんませーんとも言いたげであった。

白々しいと思いながら、文句ばかり言ってもどうせ柳のように流されるだけだと、今までの経験で分かっている。クソじじいと思いながら口を開いた。

「で？ 結局あの人誰だったの？どこかで見たことある顔だったけど」

「あのお嬢様が追い出したかわいそうなお方は、隣国の宰相殿ですよ。息子の嫁に来てくれということであのような場を設けたのですが…あんな追い出され方をしたら…まあ破断でしょうけど」

「いつも言ってるけどね！わたしに縁談の話を持ってこないでいつてるでしょ。…姉さまにでも持っていきなさいよ」

「お嬢様。私、トルド＝ルイビウスはあなたのお父上にあなたがお生まれした時から、誠心誠意お世話をするようにと仰せつかっております。それに、あなたのことを実の娘のようにも思っております。ですので、あなたの晴れ姿を見たいと思ってもいいではありませんか」

「……トルド…」

「まあ、早く嫁に行ってもらえれば私の仕事がなくなり、少し早い悠悠自適の老後が始まりますしね」

さっさと休みTEEといわんばかりであった。



少し感動したわたしがバカだったと少女はうなだれるている。

「まあ今のは冗談ですが。あなたは王の娘なのですから遅かれ早かれ政略結婚などで他国に行くことになるでしょう。……っていつも言ってますけどドレスの下にズボン履かないでください」

「そんな夢のないこと言わないでよ。わたしだって町の娘のように衝撃的な出会いして恋して恋愛結婚つてのに憧れてもいいでしょ。もしくは、わたしの王子様が迎えに来てくれるとか？……これは別にいいでしょーオシャレしなきゃってことないし。それに、このスカートのヒラヒラって苦手なのよ」

トルドは、お前お姫様だろ！王子様と結婚したいならできるわ！！と心の中で突っ込んだ。

「……予想外に乙女なんですネ」

「そりゃあ、わたしだって女の子だし……町の話の話を聞いてると思うことがあるのよ！」

「また、無断で城下に出やがりましたねお嬢様？」

ピクツと執事の眉毛が動く。少女は、あっ！しまったと言わんばかりの表情。

いつもいつもこの教育係から危険ですから城の外には勝手に出ないでくださいと、口酸っぱく言われているのだ。まあ、それでも少女が城下に出たことは把握済みである。そういうときは陰から必ず護衛の騎士か侍女が常に見張っているようにしている。これでもお姫様なので。本人はわかっていないみたいだが……。

「まだ罰がたりないようですね？この間も同じことがあったというのに…今度は何の勉強を増やしましょうか」

それはそれは嬉しそうにどうやってこの少女を痛めつけようかと執事は考えていた。すると焦ったように少女がわたたと手足をバタつかせながら顔を青くしているのが見える。…まったくせわしいお姫様ですねと、その少女の様子を眺めていた。

考え込んでいた少女は、何か言い逃れる方法を思いついたのかポツと手をつく。

「そういえば、トルドってガラクタを集めていたわよね！？」

「…ガラクタって、私が集めているのは骨董品です」

「そんなのどっちだって同じよ。それって昔のものでしょー…どうして男は、年を取るとそんなものに興味を持つのかしら？ だんだん死に近づいて行ってるのに？骨董品から昔の人の死を感じ取って準備でもしているのかしら？」

心底わからないといった表情で呟く。

「何の準備ですか？ 何の？」

「死ぬことに対しての、じゃない？」

「じゃない？じゃ、ないですよ、それでなんですか？あからさまに話をそらして…何をたくらんでるんですか？……罰は執行しますよ」

すると少女はギクツと肩を動かしながら答える。

「えーっとね…実は城下で貰ったものなんだけど、ちょっと見てほしいなーなんて……はははっ」

そう言つて少女が机の中から出してきたものを受け取る。まじまじと見ながら賄賂ですかと、軽口をたたきながらふむつと顎に手をあて考える。

「（どういふことだこれは？護衛の報告では、特に目を張る点はなかったはず、ましてや何かを受け取ったとなると…）お嬢様これは誰から頂いたんですか？」

「よく覚えてないんだけど、いつの間にかポケットに入ってたみたいなの？…それで、ど、どうかな？」

とこれで許してくれないかなと、少女が嘆願してくる。

トルドは、一度軽く頭を振ってそのことについては、後から問いたださそうと頭を切り替えてもう一度渡された物体を見る。

「（ふーむ…特に危険はないよう見えるが、確かに私が集めていそうな古いものではある……少し魔力らしきものは感じるが）」

この物体の材質は、宝石でできており手のひらサイズで平べったい気になるのは。

「（これに彫つてある幾何学模様だな…見たことないな、後で専門家に見てもらふようをお願いするか）」

トルドは結論付けて少女を見ると、まだかと険しい顔をしてトルドを見ていた。結構な時間考えていたらしい。

「これは、預かっておきますね。…何なのかよくわかりませんし、危険なものかもしれませんので」

じゃあいいの、と少女は顔をパツと輝かせる。

「言つときますけど罰はなくなりませんよ…それに賄賂なんて言語道断です！あなたは王女なのですからそういったものに染まっては いけません！罰上乘せです」

「なんでよー！！賄賂なんて偉い人みんなやってるんじゃないのー！？」

「どこでそんなこと覚えてきたんだか…はあ…確かに政にはそういう濁の一面が必要な時もあります、一国の王女がやれやれとやっていたら民衆が不満を持ちますし、他の貴族などにいい影響を与えません。それにあなたはこのようなことは嫌いでしょに…」

すると少女はちよつと言つて見ただけよと小さくこぼし、右手を出して、んっ！！と言つ。

「なんですか？…その手は？」

「返しなさい！ それっ！！」

執事は、間、髪入れずいやですと答え部屋を出ていく。

するとチョット待ちなさいよ！と、少女が素早く物体をつかんだ。それから二人は、グギギグとその引つ張り合いに突入することとなった。

しばらくの間、少女の交渉は決裂したんだからという言葉といい

え危険ですからこれは私が預かります、といった執事の言い合いが続いた。

「はあ…はあ…」

「はあ…埒があきませんね、ここはひとつ休戦して話し合いませんか？」

「…はあ、とか言いながら隙を見て奪うつもりなんでしょう！って言いたいけどさすがに疲れたわ…その案飲むことにしましょう。じゃあ、せーのであの机に置くわよ」

と顎で机を指して机に移動するように促す、トルドもそれにうなずいて従う。

「じゃあ、いくわよ………せーのっ！………って誰が放すもんですかっ！………」

ずいぶん意地汚い王女である。当然のようにトルドも放していなかったが。

結局どっちもどっちだった。しかし、少女は、本当に思いつきり引つ張ったみたいで執事の白い手袋をするりと宝石が抜ける。

「やったッ！！………ってあああーっ」

取った瞬間、執事だけでなく少女の手からもすっぱ抜けた。それは、すごい勢いでガシャーンと照明器具にぶち当たる。同時にトルドはあぶない！と、少女を突き飛ばし、破片が落ちてくるであろう場所から少女の安全を確保する。

そして、すさまじい光とキーンという音が部屋を覆い尽くした。

しばらくしておさまるとおどおどして口を開く。

「な、なんだったの?……トルドは大丈夫?」

「はい、大丈夫でございますが……しかしこれは目くらましの類でしたか……特に外傷はなかったようですね」

そう、と答えながら前を見る。

「ん!?!…誰か机で呻いているわよ?」

「そうですね?……賊の類には見えませんね……呻いてますし」

目の前の机の上で呻いている黒髪の少年がいた。

## プロローグ2

コンコンと静かに扉をたたく音が聞こえる。

部屋の中にはベットのの上にうつぶせになって寝ている黒髪の少年がいた。

少年は、寝起きがいいのか、軽くたたいた扉の音に反応し、朝特有の気怠さを離れるために大きく上に伸びをする。そして、すぐに寝間着を脱ぎ、椅子へと掛け、タンスの中から出した紺色の上下のジャージにいそいそと着替る。

部屋についている洗面台にて眠気を覚ますために冷たい水をバシバシと顔に叩くかのようにして洗い、壁にかけてある黒いチョーカーを首につける。

「失礼します。おはようございます…ミチナリ様」

侍女の服装をした少女は、部屋の中に入りミチナリと呼んだ少年のもとに近づき持っていたタオルを渡す。少年に驚いた様子はなく、渡されたタオルを小さくありがとといって受け取り顔を拭く。

「朝食の準備ができましたので、お座りください」

少女が声をかけると少年はわかったと席に着き、二か月近く繰り返し返されている朝の風景だと思う。そして同時に自分はこんな待遇を受けてもいいのだろうかと思いに耽る。

確かに、自分はこの世界では普通ではないと思うが、朝からメイドさんにお世話されるような人間ではない。自分の世界ではただの男子高校生で特に優れている人間ではなかった。

そして何の神様のイタズラか運命だかわからないが、異なる世界に二か月前に召喚か事故かでこの世界に現れた。

「もうそろそろ上がっていいよ」

「あっわかりました。ここをかたずけたら上がります」

お疲れ様でしたとバイト先のコンビニを後にする。

このバイト先は高校生である自分を雇ってくれるし、高校生という身分に配慮してちゃんとした時間に帰してくれる。少年”道成暹”は、とてもこのバイトが気に入っていた。

「給料日は、明日かあゝ貯金しとくか」

ほんとに高校生か？という独り言を呟きながらトボトボと家へと夜道を歩く。

ふと違和感を感じて、んツと後ろを振り返る。何も無い。当然だ。自分はどこにでもいる高校生、そんな特殊な訓練をしたりオカルト的なものを持っているわけではない。

視線を感じるなどストーカーされている人からよく聞く、だがそれもどうもよくわからない、暹は、そんなものはいつもと違うほんのちよつとした身のまわりの変化などを視覚で判断し、見られていると思うのではないかと思っている。なのでよく漫画などで見るかける”殺気がした”などは、はなから信じてないしそんなのないだろと思っている。そんなのあつたら暗殺とか大変だろゝなとくだらないことを考えていた。

いきなりキーンとすさまじい音がきこえた。



そして暈を囲むように上から円柱型の光っている檻が現れた。

「なッ！？なんだ？？？」

混乱の極みだった、その檻にミミズが走ったような文字でできているのがかるうじて見てとれる。これは何か危険だと感じることはできた。そして檻から抜け出そうと足を動かす。否、動かそうとした。なぜなら足が消えていつている。すでに膝より下は存在していなかった。

そしてそれは急速に、早くしろよと言わんばかりに消える速度が早くなつてく。

「うえっ！？ちよつと待——」

叫びはむなしく響き渡りもせず、直感当たってたかとも思いつながら最後まで言葉を紡がせず少年の姿は消えていった。

「——りさ……ミ——様ッ」

「……うゝん」

「…………ミチナリ様ッ！！」

「な、なにっ？！ど、どうした？！リナ？」

じつと料理を見つめてポケーツとしていた暹は、目の前に座っているメイドの少女により現実に取り戻された。

「食事が進んでいなかったようなので、声をかけさせていただきました」

そう言っただけで食事を再開する。食事は、ロールパンをいくつかと何の肉かわからないベーコンを数切れにサラダといった構成になっている。日本人としては米とみそ汁がほしかったが、これは、しょうがないとあきらめた。

「ミチナリ様、本当にそれだけで足りるのでしょうか？」

と食事を中断して心配そうに少女が声をかける。対して暹は、苦笑しながら大丈夫と食べながら答える。

最初はそれはすごかった、何がといえば食事が。それはもう、一流なレストランで出そうな高級料理がずらりと並び、シェフ付きでとてもじゃないが落ち着かなかった。それに朝から食べられるようなものでなく、見ただけで胸焼けしそうだっただけ。

次の日からは、質素なものに変えてくれとお願いし続け今のようにな朝食になったのだ。

「それで、なにを考えていたんですか？」

「あー…うん、ちょっとこっちに来た時のこと思い出してた」

そうですか、とリナは小さく微笑む。普通に可愛い、というよりこっちに来て思ったのは、あつちに比べて美人やかわいい人が多い気がするなと遅は思う。正面にいるリナが良い例だ。

肩まで伸ばされている髪の色は、さすが異世界というか薄い紫色

だった、そして、くりくりとした目は、まあ常に半分しか開いてないが、これも同じ色、顔は、欧米人のようなに蔽つい顔もしていない。あっちで言うところアジア系の顔立ちに近い。  
改めて考えていると。

「どうしたんですか？私を見つめて興奮でもしましたか？このヘンタイ」

「してねーよ！いきなり毒吐くのはやめろ…」

いつもの朝の風景だった。

「今日のご予定はどうなっているのですか？」

「いつもと同じ。食べたら婆ちゃんのとこ行って地獄の特訓、昼は姫と食事、後は先生と雑談」

パンをちぎりながら淡々と答える。

「ホントに代わり映えのない日々を過ごしてますね。それで楽しいのですか？」

あきれながらつまらない人ですね、といわれたようだった。

「なんとでもどーぞ。約束のためとか生きるために楽しいなんて言っ  
てられないの、俺は」

「約束ですか…。あなたも律儀というか、私は悪いのはこちらだと思  
いますか？」

リナはこの少年が来た時の様子を思い浮かべながら尋ねる。

あの時は本当に大変だったと、自分が来た時には、彼はいきなり王族の部屋に侵入し、恐れ多いことにわけわからない言葉で喚き散らしていた。それは、持つて行った今彼が身に着けている”知恵の話”を付けてからも同じだった。

「んゝまあ、そうだろうけどあれが最善だったよ。あの時はこっちに来て何もわからない状態だったし、それにこちらは庶民か賊、あちらは一国の姫様。どちらが権限が強いかわからない信用されるかで言ったら考えるまでもないよ。俺には選択肢なんてなかったと思う。あの時、外にほっぽり出されるか殺されても文句は言えてもどーしようもなかった」

確かに、と思う。

彼が言っていることはありえた、というよりあの人ではない人間だったら殺されていただろう。こちらの文化を何も知らない、言葉がわからない。という点を踏まえても姫様のもとに”来た”ということだけで彼の生存の可能性は極端に上がった。あれだけの人材を持ち、それを使って彼をこの世界に順応させる。これができたのは姫様だけではないのか、と提案する。

「ですが、姫様の人となりもわかったと思いますが、あの方はそこまで頑なな方ではありませんよ」

案に少しは気を抜いたらどうですか、と提案する。遅は、ちぎったパンを食べながら頭を縦に振ってうなずく。

「わかってるよ。毎日とはいかないけど結構な頻度で姫には会ってるから、あいつの性格がまっすぐでお人よしってことはわかった」

もり。だけど…いやだからこそか約束はしっかり守らないとな」

「あなたは真面目なんですね」

「約束のことか？それは自分が譲れないと思ってることだからな」

首をかしげてリナは、尋ねる。

「譲れないもの…ですか？」

「そつ これは俺の主義だけだね。人は、本当に何でもいいからこれは譲れない」というものをもってたほうがいい。何でもいい、例えば、朝は必ず何時に起きるとかでもいいから持つことがいいと思ってる」

「本当に何でもいいのですね」

「そうだな。そういうのがないと俺は毎日をだらだらと過ごすんじゃないかな」

暹は、食後の紅茶を飲みながら答える。飲みながら紅茶はうまいなあと思いつながらこの世界に紅茶があつてよかったと思う。コーヒーか紅茶で言ったら断然紅茶派だ。コーヒーも飲まないことはないけどいろんな香りや味を感じることができるので暹は好きだった。コーヒーを飲むときは集中したいときかタバコを吸うときぐらいなものだった。まだコーヒーは見ていないなかったらなかったでいいがあつてほしいなと、思っていた。

「その結果あなたの譲れないものが約束を守るといことですか」

「まあ、約束を守るなんて当然だけどな、それにそれだけじゃないし」

「あと、何があるのですか？」

興味深そうに聞いてくる。目をそらさずにじーっと音が出そうなくらい。暹は、目を伏せながら答える。

「内緒。というか、こういうのは人に聞かせるようなもんじゃないしな。言いたくない。リナだって教えたくないものだってあるだろ？」

「そう……ですね。不躰な質問でした」

そう答えながらいつもの表情に小さく陰りが見えたような気がした。暹は、珍しいなと思いつつ、気が付かないふりをした。

「いや、大げさに言っただけど、ただ話したら恥ずかしいってだけだから。そんな落ち込まないで」

「落ち込んでいません。あなたの頭は大丈夫ですか？」

少しムスツとした顔で何言っただのこいつはと言いたげだった。

「俺はその口は大丈夫かと尋ねたい……」

「いやらし！近寄るな！！」

暹は、グサツと胸に來た槍を必死に抜こうと胸を押さえていた。

それから、いつもどおりに二人でごちそう様と手を合わせて朝食を終了した。したと思ったのだが。

「ススム!! いる!! 今日是一日わたしに付き合いなさい!!」

バンツという音とともに部屋に入ってくる侵入者。

ポカーンとしていた暈は、今日は大変な日になりそうだと深く深くため息をついた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5353s/>

---

未定

2011年10月9日00時22分発行